

森本 あんり著

「反知性主義」と聞くと負のイメージがあるが、著者によると、米国では「知性そのものに対する反感」ではなく「知性と権力の固定的な結びつきに対する反感」を指し、ときに積極的な意味と痛快な破壊力さえ持つという。乱暴に言うところ「東京のインテリ」を論破する「大阪のおばちゃん」といったイメージだろうか。

本書は、米国の宗教史を紐解きながら、植民地時代から現代に至る反知性主義の誇り高きヒーローの系譜を鮮やかに描き出し、独立革命や奴隷廃止運動、女性の権利拡張運動、公民権運動、消費者運動に与えた影響などを照射する。

とりわけ、宗教的な反知性主義が、実は、建国の父祖たちの啓蒙的な合理主義や、ベンジャミン・フランクリンらの実利的なビジネス精神と手を結び合っていたという指摘は著者の炯眼だ。三者とも当時の宗教的権威の存在を疎ましく思っていたからというのがその主因だ。

エリート階級の固定化を嫌う、反知性主義の徹底した平等主義は、ヨーロッパの旧世界と

## 宗教と結びついた米国的思想

は一線を画す、極めて米国的なイデオロギーでもある。

そして、その影響は今日にも見て取れる。

例えば、米国では政権交代すると政府高官も一気に刷新されるが、その背景には、エリート階級が既得権益化することへの反発がある。この人事制度を導入した19世紀半ばのアンドリュース・ジャクソンは貴族の出ではない初の大統領で、正規の教育は無に等しかった。

他にも、テレビの伝道番組の多さ、大統領選挙の祝祭的な盛り上がり、指導者の「親しみやすさ」を重視する風土、書物よりも自然を志向する態度などに反知性主義の見えざる影響を見て取れるという。彼の国における宗教の重さを思い知る。

政治学や経済学の観点からの米論は巷に溢れているが、こうした神学的な視点もやはり米理解には欠かせない。

また、イスラム教に関連した事件が世間を賑わすなか、現代世界における宗教の重みは改めて考え直す必要がある。

その意味でも、日本における米宗教研究の第一人者による本書の刊行は大いなる福音である。内容的にも情報満載で贅沢な一冊。平易ながらも深みのある文体も印象的だ。

ただ、例えば、米国では白人中心主義を覆そうとする多文化主義も「反知性主義」と見なされているのか。あるいはその逆なのか。政治性を孕むデリケートなテーマでもある。

新潮選書

Shincho Senshu

新潮社

森本あんり

Motomoto Anri

反知性主義

アメリカが生んだ「熱酒」の正体

(新潮社・1300円)

もりもと・あんり 56年神奈川県生まれ。国際基督教大学学務副学長。著書に『アメリカ的理念の身体』などがある。

《評》慶応大学教授

渡辺 靖